

# 人生Journal

じんせいじゃーなる・4月号 第603号

発行 中外日報社 〒601-8004 京都市南区東九条東山王町9  
電話 075-671-3211  
人生Journalへの投稿・ご意見・お問い合わせは  
Eメール journal@chugainippoh.co.jp へ

## 今月の紙面

18面 **いきる**  
インタビュー「この道を往く」  
株式会社日吉屋社長  
・西堀耕太郎氏。

19面 **くらす**  
わが師 わが友  
生命山シュバイツァー寺代表の  
古川龍樹さん。



20-21面 **であう**  
対談「逢えてよかった」  
浄土宗浄心寺の  
佐藤雅彦住職と  
VIVACEの  
甲斐裕美理事長。

22面 **つくる**  
創思創愛  
京都・寺町通の  
南小野珠数店。  
真心込めた珠数  
作り。

23面 **いやす**  
私の養生記  
日蓮宗本山本法  
寺貫首の大塚日  
行さん。日本人  
の心を説く。

24面 **みる**  
インド仏像の流れ  
第11回「仏像  
の円熟期」サー  
ルナート」  
\*みんなの仏画 休みます

和傘などの製造販売を手掛ける茶道裏・表両千家御用達の榊日吉屋(京都市上京区寺之内通堀川東入百々町)は、江戸時代後期の創業。近江から初代当主が上洛し、五条本覚寺の近くに傘商として店を構えた。二代目の時、尼門跡寺院の宝鏡寺門前に店舗を移転し現在に至っている。現社長の西堀耕太郎氏(35)は五代目。最近ではテレビや雑誌、新聞で紹介される機会が増えたが、西堀氏が和歌山県新宮市の実家から、純子夫人の実家である日吉屋に移った当時は和傘が売れず、店では廃業を考えていたという。

西堀氏は高校卒業後、単身外国に渡り、日本食レストランで働く。その経験から海外で日本食レストランを開く夢を持ち、資金を蓄えるため地元に戻り、市役所に勤めていた。平成10年に純子夫人と結婚。公務員をしながら休みの時に夫人の実家の日吉屋を手伝っていたが、やがて公務員を退職して日吉屋の仕事に専念し、15年10月に代表に就いた。和傘作りはもちろん和傘について全くの素人だった西堀氏が、どのような苦労を重ねて現在の日吉屋を築いたのか聞いてみた。



## 伝統は革新の連続

株式会社日吉屋社長

西堀 耕太郎氏

## 傘を作りた

### 時代が求める

——日吉屋の仕事はどういう形で始められたのですか。  
西堀 市役所の仕事の傍らボランティアで日吉屋のホームページを立ち上げました。すると一カ月ぐらいで傘が売れたので驚きました。東京の舞踊家の方です。舞踊傘は需要は一定ですが、今は作る店が衰退し店はずいぶん減っています。それでも欲しい人はいるんじゃないかと気が付きました。  
——そして日吉屋に移られた。  
西堀 ネットでの売り上げが増え、ある程度めどが付いた段階で公務員を退職し、平成十五年に移りました。それまで週末の金曜日、仕事が終わってから京都に向かい、土・日曜に当時健在だった家内の祖父やお

母さんの和傘作りをビデオで録らせてもらいました。部品をもらい、実家で平日の夜、和傘を組み立てて作業しました。当時の日吉屋は傘が全然売れず赤字続きで、全員のモチベーションが下がっていましたね。売り上げは年間百万円ぐらいで、先代さんは「傘なんてやっても駄目だから、公務員をやっているほうが生活も安定して良い」と言っていました。  
——社長就任の前ですね。  
西堀 まだ法人ではなく個人営業で、家内の母が社長でした。やがて法人化しましたが、すぐに社長が亡くなり、私が社長を務めることになりました。そのころすでに家内の父も亡くなっており、相談する相手や和傘を作る人、営業や経理をする人もいなくて、一から自分でやらないといけない状態でした。(18面に続く)

## この道を往く

インタビュー

母さんの和傘作りをビデオで録らせてもらいました。部品をもらい、実家で平日の夜、和傘を組み立てて作業しました。